

両親間葛藤が青年期の精神的健康に及ぼす影響

崎 山 美 穂

問題と目的

青年期は、自立する準備を整える時期であり、家族が安定した愛着関係を提供することが発達課題を達成する上で重要となる。この時期に両親間葛藤に曝されると、青年は抑うつを高め、自尊心を低下させる（川島・眞栄城・菅原・酒井・伊藤, 2008）。

両親間葛藤とは、子どもの両親の意見が衝突し、言い争いをすることである。両親間葛藤が子どもの精神的健康に影響するプロセスとして、子どもの認知的評価や情動反応が媒介要因になるが（e.g., Buehler et al., 2007）、特に年長の子どもには、認知的評価の影響が大きい（Rhoades, 2008）。また、子どもが両親間葛藤に巻き込まれることは、不適応な認知、情動反応を喚起するとともに、精神的健康を悪化させる（e.g., Fosco & Bray, 2016）。このような悪影響は、子どもが使用するコーピングによって緩衝されると考えられるが、先行研究では、数種類のコーピングが混同して検討されており、一貫した結果が得られていない（e.g., Tu et al., 2016）。

状況や出来事の意味を認知的に変化させることによって、感情の強さや種類を変える認知的感情制御方略（Garnefski, Kraaij, & Spinhoven, 2001）には、個人の成長という観点から出来事にポジティブな意味を置く「肯定的再評価」、現実の出来事について考えず、楽しいことやうれしいことについて考える「肯定的再焦点化」、ネガティブな出来事にどのように対処するか考える「計画への再焦点化」、ネガティブな出来事に関する気持ちや思考について考える「反すう」、極端に出来事の悪い面を強調する「破局的思考」などがある。両親間葛藤に対する認知的方略の効果は、認知的再評価と気晴らしの使用が、抑うつと身体的健康の悪化を緩衝するという報告があるが（Nicolotti, El-Sheikh, & Whitson, 2003）、複数の認知的感情制御方略について、それぞれの効果を検討した研究は見当たらない。

そこで、本研究では、両親間葛藤の認知が青年の精神的健康に及ぼす影響を認知的感情制御方略の各下位方略の使用が調整する効果を検討することを目的とした。

方法

調査協力者 大学生194名の協力を得た。回答漏れのあった者、両親と同居時の記憶がない者、回答終了後に同意を撤回した者を除く170名（男性52名、女性116名、

その他2名、 $Mage = 19.89$, $SD = 1.44$ ）を分析対象とした。

調査方法・調査内容 オンライン調査システム（Qualtrics）を使用し、インターネット上で回答を求めた。①両親間葛藤認知の測定：両親間葛藤の深刻さは、両親間葛藤認知尺度（川島他, 2008）の「葛藤の深刻さ」（ $\alpha = .87$ ）12項目4件法（1:ちがう～4:そのとおり）、両親間葛藤に対する巻き込まれ感は、両親間の葛藤に対して自らが何らかの立場を取ることで「巻き込まれ感」を測定する尺度（川島他, 2008）（ $\alpha = .58$ ）5項目4件法（1:ちがう～4:そのとおり）、子どもが認知した夫婦間葛藤尺度（山本・伊藤, 2012）の「境界不全型巻き込まれ」（ $\alpha = .86$ ）5項目4件法（1:そう思わない～4:そう思う）を用いて測定した。②両親間葛藤に対する認知的感情制御方略の測定：日本語版Cognitive Emotion Regulation Questionnaire（榊原, 2015）の「肯定的再評価」（ $\alpha = .82$ ）、「肯定的再焦点化」（ $\alpha = .80$ ）、「計画への再焦点化」（ $\alpha = .89$ ）、「反すう」（ $\alpha = .85$ ）、「破局的思考」（ $\alpha = .84$ ）各4項目の合計20項目を使用し、両親の意見が衝突し、言い争う事態に遭遇した際にどのように考えるかについて、5件法（1:ほとんどない～5:いつもある）で回答を求めた。③精神的健康の測定：K10質問票日本語版（古川・大野・宇田・中根, 2003）（ $\alpha = .91$ ）10項目5件法（1:全くない（0点）～5:いつも（4点））を用いて抑うつを測定した。日本語版主観的幸福感尺度（島井・大竹・宇津木・池見・Sonja, 2004）（ $\alpha = .76$ ）4項目を用いて主観的幸福感測定した。④デモグラフィックデータ：性別、学年、年齢、両親との同居の有無を尋ねた。両親と同居以外の回答の場合、両親と同居していた当時のことを回想して、両親間葛藤に関する質問に回答するよう求めた。

結果と考察

両親間葛藤認知と精神的健康の関連 両親間葛藤認知と精神的健康の関連を検討するため、相関係数を算出し、Table 1に示した。女性では、両親間葛藤の深刻さ、巻き込まれ感、境界不全型巻き込まれは、それぞれ、抑うつと正の相関、主観的幸福感と負の相関を示した。男性では、境界不全型巻き込まれのみが、主観的幸福感と負の相関を示した。

性差が認められ、男性よりも女性の方が両親間葛藤の影響を受けやすい（山本・伊藤, 2012）という先行研究を支持するものであった。男性においては、両親間葛藤

Table 1 両親間葛藤認知と精神的健康の相関 (Pearsonの積率相関係数 (r))

	両親間葛藤の深刻さ	巻き込まれ感	境界不全型巻き込まれ
抑うつ (女性)	.30**	.24**	.28**
抑うつ (男性)	-.06	.12	.08
主観的幸福感 (女性)	-.31**	-.27**	-.27**
主観的幸福感 (男性)	-.28	-.20	-.35**

** $p < .01$ * $p < .05$

認知自体が精神的健康と関連するのではなく、両親間葛藤への巻き込まれによって親子間境界が曖昧になる状況において、主観的幸福感が低下することが考えられる。

認知的感情制御方略の調整効果 両親間葛藤認知が精神的健康に及ぼす影響を各認知的感情制御方略の使用が調整する効果を検討するため、従属変数を精神的健康とし、ステップ1で性別、両親間葛藤認知、各認知的感情制御方略、ステップ2で両親間葛藤認知と各認知的感情制御方略の交互作用項を投入する方法で階層的重回帰分析を実施した。

①肯定的再評価の調整効果：抑うつを従属変数として、両親間葛藤の深刻さと肯定的再評価の交互作用項を投入した場合 ($\beta = -.19, \Delta R^2 = .03, p < .05$)、境界不全型巻き込まれと肯定的再評価の交互作用項を投入した場合 ($\beta = -.22, \Delta R^2 = .05, p < .01$)、R二乗変化量が有意に増分した。単純傾斜分析による下位検定の結果、両親間葛藤の深刻さが抑うつを高める影響は、肯定的再評価の使用頻度が低い場合に認められ ($\beta = .40, p < .001$)、高い場合に認められなかった ($\beta = .01, p = .92$)。境界不全型巻き込まれが抑うつを高める影響も、肯定的再評価の使用頻度が低い場合に認められ ($\beta = .47, p < .001$)、高い場合に認められなかった ($\beta = -.02, p = .85$)。青年の両親間葛藤に対する肯定的再評価の使用は、両親間葛藤の深刻さや巻き込まれ感が抑うつを高める影響を緩衝する効果を持つと考えられる。

②肯定的再焦点化の調整効果：抑うつを従属変数として、境界不全型巻き込まれと肯定的再焦点化の交互作用項を投入した場合 ($\beta = -.17, \Delta R^2 = .03, p < .05$)、主観的幸福感を従属変数として、両親間葛藤の深刻さと肯定的再焦点化の交互作用項を投入した場合 ($\beta = .13, \Delta R^2 = .02, p < .10$)、R二乗変化量が有意傾向ではあるが増分した。境界不全型巻き込まれが抑うつを高める影響は、肯定的再焦点化の使用頻度が低い場合に認められ ($\beta = .43, p < .001$)、高い場合に認められなかった ($\beta = .09, p = .38$)。両親間葛藤の深刻さが主観的幸福感を低める影響も、肯定的再焦点化の使用頻度が低い場合に認められ ($\beta = -.42, p < .001$)、高い場合には認められなかった

($\beta = -.15, p = .16$)。青年の両親間葛藤に対する肯定的再焦点化の使用は、両親間葛藤の深刻さが主観的幸福感を低める影響、巻き込まれ感が抑うつを高める影響を緩衝する効果を持つと考えられる。肯定的再焦点化は回避的な対処方略であるが、両親間葛藤という対処困難な状況においては、ポジティブな効果を発揮する可能性がある。

③計画への再焦点化の調整効果：抑うつを従属変数として、両親間葛藤の深刻さと計画への再焦点化の交互作用項を投入した場合 ($\beta = -.13, \Delta R^2 = .02, p < .10$)、境界不全型巻き込まれと計画への再焦点化の交互作用項を投入した場合 ($\beta = -.14, \Delta R^2 = .02, p < .10$)、有意傾向ではあるが、R二乗変化量が増分した。両親間葛藤の深刻さが抑うつを高める影響は、計画への再焦点化の使用頻度が低い場合に認められ ($\beta = .34, p < .005$)、高い場合には認められなかった ($\beta = .10, p = .35$)。境界不全型巻き込まれが抑うつを高める影響も、計画への再焦点化の使用頻度が低い場合に認められ ($\beta = .37, p < .001$)、高い場合には認められなかった ($\beta = .09, p = .39$)。青年の両親間葛藤に対する計画への再焦点化の使用は、両親間葛藤の深刻さや巻き込まれ感が抑うつを高める影響を緩衝する効果を持つと考えられる。両親間葛藤に対して問題解決を志向する行動的方略はネガティブな効果を持つこと (e.g., Shelton & Harold, 2008) が指摘されているが、本研究では、青年を対象に、認知的方略を測定したことから、対処の失敗が生じにくく、ポジティブな効果が認められたと考えられる。

本研究の限界と今後の課題 本研究の限界として、第一に、一時点のデータであり、因果関係は慎重に検討する必要がある。第二に、調査協力者が大学生のみである。約半数が両親と同居しておらず、同居時の想起が正確でない可能性、両親間葛藤以外の要因が影響した可能性がある。第三に、階層的重回帰分析における説明率が低いことがある。測定しなかった学業ストレス、友人関係などが精神的健康に影響していた可能性がある。今後は、これらの変数を含めること、両親間葛藤に影響を受けている者に対象を限定して検討することが考えられる。